古いんだか新しいんだか・・・・

「大卒、給料よし、性格だって悪くないのに・・・」
結婚しない子供に焦る親と、
「いい人がいたら」「自分では探せない」子の荒技？

うちの子にかわってお相手探し

父母の代理お見合事情

先月下旬、都内のホテルで行われたNPO法人「学校法人倶楽部」による代理お見合い「親の目交流会」の様子。

「適齢期」なんていう言葉はすでに死語、いまや30代前半の女性の3割以上、男性はなんと半数近くが未婚という。晩婚・未婚化時代。「まあ、そのうち・・・」なんて悠長に構えている子供にまなじりを決する親たちが実力行使に出たのが、これ。入会費用5万円堅の盛業はいかに――

「息子は優しいですよ、これまで、親に反抗したことはないですから」「うちの娘は料理が好きで、よくパンやケーキも焼くんです」――こんな会話が、ホテルの会議室で交わされている。これは、独身の男女向けの「お見合い」だ。「わが子を結婚させたい」と、参加費用を払ってまで、当人によるお見合いパーティよりも、ご親たちのほうが積極的です」と、大阪市内で仲人業をしている「高砂会」代表の山田洋子さんはいう。

いまやお見合パーティは、今回的にこの会場形式が代わる。同転寿司屋公式、「お見合パーティ」など、古いはずの「お見合い」が、新しいかたちに生まれかわっているのだ。先ごろ、都日那寺が子化対策担当大臣（51才）の、国営でお見合い事業をするという案が話題になったが、そんななか、民間主による、代理お見合いが出住を浴びている。

「普通」の親たちが熱心に参加

国立社会保障・人口問題研究所の「第13回出生動向調査」結婚と出産に関する全国調査」によれば、32ページのグラフのように、見合い結婚の割合は、戦前は70％近くの状態だったが、'60年代に比べて以来、現在では約6％と恋愛結婚との差が開く一方なのだ。それなのに、なぜ、いま、お見合いなのか。

親による代理見合いは、'99年に老舗の結婚相談所が、親たちのために、娘・息子をいい合う交流会を実施したのが始まりだ。それなのに、なぜ